

近世吾輩人物記
全

特別

14

696

192



一本 近世東都著聞集ト号スルモノ

久々の河老の筆のそぞろのたゞしき人のみならず著聞集

又近世の著聞集の著聞集の著聞集の著聞集の著聞集

又近世の著聞集の著聞集の著聞集の著聞集の著聞集

又近世の著聞集の著聞集の著聞集の著聞集の著聞集

近世の著聞集の著聞集の著聞集の著聞集の著聞集

武に講師 馬文耕

本文同... 題号の異なる... 將三子書と... 近世有ハ如何なる... 年

696
192

近世吾妻人物記序



近世吾妻人物記序... 吾妻人物記序... 吾妻人物記序...

吾妻人物記序... 吾妻人物記序... 吾妻人物記序...

吾妻人物記序... 吾妻人物記序... 吾妻人物記序...

吾妻人物記序... 吾妻人物記序... 吾妻人物記序...

吾妻人物記序... 吾妻人物記序... 吾妻人物記序...

吾妻人物記序... 吾妻人物記序... 吾妻人物記序...

そのまゝのまゝん矣今市河の七書也を親父をいふ程に
足る集居致さく物難威の言とてしむるありし故特
比伴君入るといふ事の中を先づ空より御命をいふのも
賢重に教ふ言とていふく物難威に人のいふ言は度ごと
く是れ他毎へく偏にあらんはさく亦るの中は青文とて
黒文といふ事ありしとてむる物難一ぶらんと
はるは神の事とて考へるも一今八宗は智威を
方とて女子流の事とていふもいふ事多し一國の

大なる物本つ用とていふ一玉のふゆ生とて目りて指式ハ
くもるも亦きくともいふ事世にまはる事とていふ事
浦くともいふ事物難威の事とていふ事とていふ事
そとていふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
御書とていふ事の事とていふ事とていふ事とていふ事
多るは此の事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事

予の不可多しん詩多志也といふも文盲雜念のやまも
生れ為ふ海すまき中みく續めたる本はうたふ
曲もあつどもみ捨てて口誤りも福を落者百なり
解義ゆづりせとせしむ解きたる不誤せざるや
りや小人乃言以事以事まゝにんりか

實政十代末年重陽吉辰

橋井卷

山本元和序之



近世吾妻人物記目錄

- 夢若くは玉琴しが侍
- 万世に八つ橋伝水鏡伝の兩侍
- 實荷を身別が侍
- 山本れ勝山が侍
- 三浦抱古を雲が侍
- 瀬川の菊と虫が侍
- 芳澤河内を侍
- 山中平九郎が侍

○ 中村七之命が侍

○ 市川國十郎が侍

○ 田村川が當代が年收侍助が侍

○ 本郷八郎が侍 并に生体掛額の中東

○ 新井本所白子お徳が侍

○ 多岐長四郎二百廿五郎十郎御意

を命せしむる御年御系莫一様と成る事

○ 親世九老が歌ふ御事

并に御神威あり

近世吾妻人物記

愛芳公玉琴が侍

此の御系しり

幸清の事よく知る御事

しりある

之、流雲は操兵勝初めをいふことり、松の徳

と稱ふれり也、吾松の位よりあつたるといふは

有依の幸清の事におとらけり、吾松の事と云

は、吾松の事と云は、御事よく知る御事

あすしとむ直達のもちとりの忠アがわの生年
二十五年也竹島へが水瀬子とるの海防橋と傳へ
親方前例のききしよ由是初以而子とれがそ文
句ふり又陸の玉吹うとるなり諒其情海を極心
なるもやとらしむるなりがしとあり

百字金八稿
西傳記

何れも神宮と云神師の愛句

何れも年工界孫の花乃春

いふも半面桜達てれ画の強きるとしと云達てれ九
年面もと云見せ也常れ若界孫の海防橋と
出のしとの初きとるふの波能と云なりし阿波の橋
戸ふ風と云くまの頂上と云るを細橋のきとる

我情のあれ流の如く思ひに彼は己の心でして
身は己果し今も底ゆれり我るにけ者情無
きと我思ふまの河の如く社の夕乃記信の
我とらひていとも様ふりく信と女の信り多れ
事非小なりりぐりくしと深くもありしゆは余
さよと信りサレた夜の美雪の舞伴が我よめと
たまいに何れかの神々ともめなりしよと身あはく

我とて一或時そ中し所を者信りあはるふ心
得たるや夕雪のあはるやふ有しふやと
雪がふとてに様ゆ今もてまゝ向をふ何
ふおと大井馬所の屋敷とて今も以後もいふと
代りて事とて中し所のちかか人のこる中もて
たのハ美雪がふとて今もあはるやとて今も
我とていれ出し夕雪がふとて今もあはるやと

多の時よりし金子の河をわたりてしる海なるべし今此
身おしははき子の海をち切られをわしはれが申
為閑の世節ちるむち小毒菊し高忍ぶとふふもが
又おちるむむぐしおくめんもる氣笑しや件の時と
押載ふき友はつものいんごしと金入の紙入は入る
ちるさふりし揚を入をせし使らる寄信記おれと
し天倉るおぐししそ後ら寄方又信を大重氏
物もありのたぬれよ代たち寄ら寄方又利後なること
申んとせし時又寄方ともあ物とる物とるふ物とる手代
中寄らへおら寄方及のん倉ハ寄伊能とるもふるは
たふふ寄物とるおとせしゆは何ぞん破りしとて
いとる折角大家の歸書とてしそふん倉とらん
まふしとてそ友伊の物あるもふれさ申をえん
隠しられ物の通り申ひりる石に通の操勢入ん

清く世を以てり男をく入らざり一日と夜をかくしおのま
胃に血脈をたつるるを急喉られ今公にれおの
がくざり血の丹語をとりやとあ刀ふいつ橋を
階をよゆゆをとりよふ船車に切らるれ船よ六
はじふおよととづこはえ切らるれ船よ下の草の
後船の中いざめとあたり清くあがきたる刀は後
菊の行のたさぎおそひあひしは船泊瀬といひしや

そんハ水も海もどよの海もどよまふ清くあを根はひ
あんとあよめあれ二階よりあ午後ひ中れ何大明
たり側とあの方へ橋ひのきすのあえちあさうださし
あさうととんべふ根翅方あさうととんべふあさうとと
あんとあさうととんべふあさうととんべふあさうとと
あさうととんべふあさうととんべふあさうととんべふ
あさうととんべふあさうととんべふあさうととんべふ
あさうととんべふあさうととんべふあさうととんべふ
あさうととんべふあさうととんべふあさうととんべふ

言海と云松女史のあふ教書と云へしゆと
ありて人あはれハ福がるは若くは女
に近き近づく能は道場より一と云ふ
と年とて目左田をそ教書せしとて
女をそもあふ思ひせしなをそとて眼を
見たり其時子孫

鬼灯母舌二寸此物也

此物也一とありて何と云ふべし

實名を自別つ傳

晋子の傳也

曉乃及吐冬降りうほらてきん

けり其角流られ白也白れんは細きとありてと道り
まゝ母と一と後朝の夜々吉京は曉酒の必
るる流とらん可也それありて丸花あり子細
江下河上其何を園り而もつる個城は其酒若き
易を所記人立名同をては其ありて親しく細と

情を結ぶ心は唯喜ぬく事ありてはあはれたえ
初念にても極ち切りて別原のちあはくは先
よりしある報のいとゆも昔も中も無く一衣の
夫とあそち切よりの事新佛と名ひて世原の身
實はそして砂地らん成るゆげも是れを分抱
しめ何れ成る言ふ事こそは麻路とするゆなり
はさえず細皮のツネ方ハは道の情なりと
中巻れどもあはくは世にいとよも乃がゆどもを
小評ぞし事也或時細念のち極ちくはたは酔ひ
ゆ其女抱て年創し世原し乃がる外抱こそあり
曉方大女吐逆せしは元君のちありともあはれ
しゆらばくもとりして奥州にはおひそは痛
ゆるま其あふもあ男りせせ乃情は通るごと
るる海に抱あまして物原の世原なるの老ゆらんあは

是事也中へから金慶の按にのりてのりてのりてのりて
 やうのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりて
 新なるゆよいなり女抱せし中程里あり一万余者
 物にのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりて
 勝りしもの也といふなりといふなりといふなりといふなり
 奥州がしるべき家姓なりは紋代をばして彼名又字
 ありていんいつりなし。とちかく中江所橋を所也
 かしり九人の後いふ身の所とありてのりてのりてのりて
 ありては信ありてのりての子は胞衣母は父親の定紋とあり
 のりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりて
 ありてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりて
 のりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりて
 のりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりて

山本氏胎心が傳

京所二月山本曲の抱子橋らとふ橋あり
是ハ二重^{さんちや}の女帝のまじごと志しくとめさしくを
清のわぶがしく思して情ありと名を海の御
師方の子気雲とふ女の句

あしひらきまのしり
不肖^{ふせう}の雛がしくほくやとるなり

けいさある時二月と己の所々山本は抱ふが所
安とんをれを雛ありは酒はたをくぶなりとて雛あり

是れはさうくハ人乃方^{あしひらきまのしり}の雛ありとて思ふはととふが
承くけらるはとて思ふはととふが
文母とてく雛ありとて思ふはととふが
才とて雛ありとて思ふはととふが
心も個性ハ凡そ毎くとて思ふはととふが
事何れもく雛ありとて思ふはととふが
心も個性ハ凡そ毎くとて思ふはととふが

そこの所でも多しやうと云ふ事宜の意しるも人我古の
所しきみ物ひくまで連発の中は彼も成れせし
んらうれきし近しやうしふのめ情もさういふをりし
信長も一色好法師のほししやうもさうさうさう
許由もふも忠と捨くし今川勝山といふは
さうと云ふ所は稱歎さういふと云ふ歎
しふは成れさういふと云ふ

三浦抱朴古為書傳

晋子其角の意の
京所乃猫通入なり揚角所

い句冬春のまうく猫みふ事也 猫サカレ 坊てさきの
おまれなふし今此をふ也京所の猫とは抱女
坊猫みんさういふと云ふ事あると云ふは坊とも今
其角流の秘法をいへん成高教をいふと云ふは
事ハ正風神子といふ連発さういふハ成孫の頭ハ

左又指子の系所一節ふ良の楊を入く候ハ昔日
箱と抱かかせくおのひくお首玉ふくしきりやをな箱
此家也しゆりあつて松の箱は抱候ハ乃中母
の物楊を入とる事とそ酒の湯を系所の箱乃
揚田の母ふと風雅小なつるをうりふづく吾酒
をの指子の箱は抱せ乃伴せし根元ハ一節で為
抱子乃唐と云候女とけの唐の唐と抱子

めま物く人のいふ也言尾乃唐と云ハ代々し
是元係七八の比は指子の乃ハ代々唐と係
女也と平夜平お別列女侍ヲ
より甚好箱板切板とある事け乃唐ハ平生こ色れ
つるもな女指子乃唐と係候物と今更の比は
そは唐也しゆりあつて酒のくは口をさしりる女この又
け深しかくめんとそやゆると也と云が中ハ唐雲ふ
候よりしゆり指一足ゆく朝又削とるから候也

宿るを今行時と外にわが春の夜れ時と猫の
妻とふあまもこの世の心と毎子えとくらぬは
神阿ふいととる月ととる春の夜れと霧も
海ととる火ととるのきととるや雲ととる月ととる猫
ととる心ととるあまもととるこの世の心ととる毎子えとくらぬは
たれととる海ととる月ととる春の夜れと霧も
ととる火ととるのきととるや雲ととる月ととる猫
ととる心ととるあまもととるこの世の心ととる毎子えとくらぬは

いかにととる猫の夜れととる春の夜れととる火ととるのきととるや雲ととる月ととる猫
ととる心ととるあまもととるこの世の心ととる毎子えとくらぬは
宿るを今行時と外にわが春の夜れ時と猫の
妻とふあまもこの世の心と毎子えとくらぬは
神阿ふいととる月ととる春の夜れと霧も
海ととる火ととるのきととるや雲ととる月ととる猫
ととる心ととるあまもととるこの世の心ととる毎子えとくらぬは
たれととる海ととる月ととる春の夜れと霧も
ととる火ととるのきととるや雲ととる月ととる猫
ととる心ととるあまもととるこの世の心ととる毎子えとくらぬは

て飛りりるをへ 肝とほくはを打て感ふは
そは枕もやみらんをる雲代ん世しとわ
ひしあて通り雲と世し猫代んと付うゆき
なる猫代殺しゆこそ平急也日酒宿もせし
故猫身存忠とつんぶて如そつるしきん根と
いふぞ殺せし事の時をふも何と威て從
物るる雲代も一夜のほほるるぶゆるぐしその
猫の背と胸ととつふあまんと道場か理を猫代
としふ城と連るる長雲代供まししるるんそ
しあ指ぬおひのや良もくハ猫代何ん先子の物
神むるるおれし風信やちるるしと也

瀬川結考が傳

身乃め取あるとやし 此書

元文の筆を述す

結考が白也

功と積しとふら別年成候り也年功積と女乃
情と候物して候るも人世と花実相輝
さるハ候くのまゝ人古庭み平生とまじつかまひん
まづはははらひ也秋松言取の大半はるひはまじと
まゝも也古法村小侍法がち知おう法階寺先覚
かむくまひの百もあまもまじく奥のたが起りしと云
しと女ハもあつたしあひしが西病のそ成候し候ふ

女の情やうしと云ははる大全まじけまふんまふりしと何
候さま也也秋の離家りハ秋也古花書あが始しと
今二月あはあしとの秋ハを候ぶるこ平生も女
秋をめぐ物めりしとに候る法氣ふれむに候
候物ぞうし候概え男つれハ自然と陽氣の整
んまるん出さうか物ぞうしと川
女ぞうせ乃まらめり候川
秋の夜中を男なほもあ

物務の法流を志せば他表は又一うらべと
作し居意と他るとちり能くさればかくお言
海物務の作意がなむと申す一と申すのん誠
牛物一白んの変理子のつる若杯の妙もと申す
初る事よりしちう一えんむらけぬ片意を初り乃
物子強の何や無一初るはごや女のせう物も終
みゆべた男ふりあめこと而を志すは是居意に

他るとは物との法をせ女のふれ居意はうらべと
あふく一んをば作意の御がうと申す、申すは
室をいづくが居意と申すといふはなるを
ふりたれども一してんちかると申すうらべと
居るとは物とて蜀と申すは物なりと申す
物中を長十第^{長十第}と申すは古居^{古居}に相^相と
申すは相^相の長十第の居を候意のはりて

向中かがいがくゆきて引きつこそふ長十郎のや
さうで無^い連二友も二友もは此代はあしきと書れ
長十郎大なるおれふ家司のち長十郎の
れんも也此女の悟字いふうでハなしと云はる
大なる後とさうんごううとさふんめ長十郎がむ
かぐらふんかと九巻もむふうとさふんめ長十郎の
後のもおれいふふのめいおれいふふのめいおれい
つきおれいも長十郎のめいおれいも長十郎のめい
自分今ハ中へ後とさうんごううとさふんめ長十郎
せり長十郎のめいおれいも長十郎のめいおれいも
あが氣取のめいおれいも長十郎のめいおれいも
十郎のめいおれいも長十郎のめいおれいも長十郎の
のは取也と此女のめいおれいも長十郎のめいおれい
何とらんめいおれいも長十郎のめいおれいも長十郎の

うんととる意と云はるる也也其の意は此の意
倭成はうまの悟をいれし時と相えとふまづ
のくかにいそぐとてまづまづいそぐれよと
あつとやうに相えぬの事也と信じてあつと
と今云はれ也其の意の心はとまると其意が
せし或るやうに相えぬ事也其の意は元
長治と云はるる也其の意は相えぬ事也

關川南の意と云はるる事也其の意は
老の事なり其の意は元長治の事なり其の意は
通じたる事也其の意は元長治の事なり其の意は
一は其の意は元長治の事なり其の意は元長治の事なり
征伐の時肥後國を其の意は元長治の事なり其の意は
日切玉乃の意は元長治の事なり其の意は元長治の事なり
と云はるる事なり其の意は元長治の事なり其の意は元長治の事なり

今寫したる也
松平丹後守の意

わよは女色の花箱あて松水も流るる流るる香くら
そとる有てたて目所がもちりて口歌をわぬの
ち常とやと陳中の中もあやせんと是村の伝え
御大將のそにおかより秀吉をばさんたむ女のあこ
甚文章は甚ま今故陳中も伝へてしむく歌と
やうにやうも討死もしぬらんや又今歌あや
も杯扇の紙やうに流るるやと葉ぐはひいざう

けもの宿もあやむらう葉ぐはひいざうのそこのな
つうくは生席伝る那うま川うそ西の國ふあひよ
とあゆみのこそ山川うるふ満あはしうあこと斗
あゆみの入るこそ我々のこそあはしうと伝るるま
あはしうそくままのあはしうとあはしうとあはし
あはしあはしあはしあはしあはしあはしあはしあはし
あはしあはしあはしあはしあはしあはしあはしあはし
あはしあはしあはしあはしあはしあはしあはしあはし

米女とや侍をいふ勅遣寺の家は也今後の御陳を
は米女嫁調ひて二日目に出陣しつゝ其書あるに
由と云ふもあはれ御代信之禮の御子まをせし御女
まをさるゝ御女の名もいふん又御とまをせしつゝ
御代別巻の御子まをせし御女の名もいふん
残す御女の名もいふん是をいふ御女の名もいふん
つとまをせし御女の名もいふん是をいふ御女の名もいふん

隔てし御女の名もいふん是をいふ御女の名もいふん
も米女と御女の名もいふん是をいふ御女の名もいふん
是をいふ御女の名もいふん是をいふ御女の名もいふん
士も御女の名もいふん是をいふ御女の名もいふん
是をいふ御女の名もいふん是をいふ御女の名もいふん
御女の名もいふん是をいふ御女の名もいふん
御女の名もいふん是をいふ御女の名もいふん
御女の名もいふん是をいふ御女の名もいふん
御女の名もいふん是をいふ御女の名もいふん

けりて御孫子十の条の事一冊に蘇門傳授也
を論ひ吾人の御免する也只延びて吾人可傳る
あやと一通りしあづ〜傳の心ハ時ると云
るは初音・麻衣とく〜ふゆり合々車代悦〜
多と安んといふ〜無けける城さあ言は具なを
はな〜母孫安ん〜してハよハ〜とよも〜いり
中り〜ぞ 梅川の信正とて〜か母より傳り〜

物も竹の〜と初音の心〜と後〜と
初音の信正と云は〜けり〜と云〜ハ
孫安ん〜り〜と〜あや〜と云〜ハ
人間の心〜を〜御免〜と云〜ハ
が事也古あや先ハ〜と云〜ハ
孫一の御孫也梅川多子平源或傳の有り〜が御免が
御年ハ源是〜と云〜ハ

だらうせしとやけぬか川の信正初音此信正
とて芭蕉乃たこのまふ事知りしとれし句也
依こ何ちやと彼信の何先はる少年信正
もどし時極くそ丈をせり年ふ何をせし此
事と何也何ちらとを思の意味とて思たこも
まよふぬ蕉門の信正也からの何先を

二十一年の備前後名給也ん子説也ん以てこれ也
以年秘してたる人にさりふ他に説りし也の事を檢して
考ふ也ん一一事理りこうづとも此事を先に考ふ
ちらんはい春水を分年故の信正なりともども本
るれ能の事と信正也の事と多時也の事と也
極信也とするかの事也石橋ももどくも也
一一府通ハ他の事也ならぬ也今も十也也

頃し物中身の河を先河とも道ぬが石橋のうへ
代をぬかぬてのふ家政益とハ括別ふまふる代
かしくさひ古河の先古河をも海士の玉丸のり
年とせし時地遠たさひ連春水麻子れも括
別ありと祿員をその中子ニヨウカトア人可也
度とちくと云候子ありし度とちけて教とあり
あげふんの麻子とんえれ振りも或人春水に

新しといふ所の橋ハ海軍城と云ふ御地也其より
んとらんをばふ麻子と振りあてのくハ務守河いん
と申あれを春水益てさうるハ先凡年一の事や
おの具年益のふりふかゆをば麻子山も浪も花
と雲しはつと想くあゆと府の代の子んも年也
た之を地遠無とていふいと佩お府の麻子と揚て
玉子たさ月ハるまきくたりとてりと徳も府

かゞしつぞきりていかにとあはれなるな春水
けふも人さゆゆら子考あづきの中村をまが
せし殿に双寺の折る長女の文句ふ月ハ物ぞ
有りのと云時子府を成らげて吾も子とえん
ふそのゆるりしがハ何物とて井平と
おきまがらるのふいゆとせと念ゆるな娘也
たしる物と古平井に執持く女とていふは
今女もあはれとていふは女とていふは
いかにあはれとていふは女とていふは
こましくあはれとていふは女とていふは
青のしるりとあはれとていふは女とていふは
ふふ作中師とていふは女とていふは
かゞしつぞきりていかにとあはれなるな春水の
月つらハ物ぞの山根乃鳥物とていふは

吾水中央河内先高十第又古布送し
此幾年古古今有ゆしと下平并事ありし
採りし事しそらふ安の功者とや

山中平九第巻せし書

之探の正風の招句
帆となるし帆とある風乃芭蕉の南

生らういりる物人るは論多れ高生とし習化しめ
後世の事造化の成り世とありし人る後世と
信しそ事とありしと二十相八十種者と成とる
それら多事し法ありと云性空上人生身也書
浪みさひ法然上人の生る習至不射而し日蓮ハ云
光天子と梅小者とせ事下りぬ梅を今め云
是そそ人のあふよそ外乃習ふぬ今世習者

いにそ業の由とゆへ一六八日思ふにの事さうじよ
だういふたうて身まへと一十がうとと語れん感道
すもあにもし心あふ候はうまづ一古山中平の命は極く
畏しと事の上より後者もそ悪役の初人を畏女
怨良女盤女拓子ゆいゆ一者そ拾引傳授の教のく後
ぞと極有く山中一流の傳と伝今にあらはれぬ
怨良女ゆいゆを傳へぬら
古宮生れ監う通ぬ寺のゆ結ぶ入相の持子をぞらま

ありと似げさむを所へ極をいづくとまなく時あふ
り年暮るふ所花れ庭とるりらと也精身の上子
そ如女之神流の大母也馬のつ流のえ和とる時馬子
宗子の字たはんうこれを靈切のとまをる本也家さ
馬の白れと初らむして馬のん成年とてくも縁と縁
れ傳とハのまきうととひをさるあつん成多也神ふ
初りてち傳一日馬と深と化して馬のん成ゆえ

そは後亦人同す立河の流子なるの言を破す
りて神流と爲すは存がたし神とハ神代と爲す
ゆひ今も古も其用は事なるは古代功立人
と云ふはたし事ハ如是なる也古年女の言とて言
れどもいと古年の事あり山中早の事或は神家の乃
ニ階より鏡よみハ事如きの言具の教と云ふや
つましそがしてハ世をんがうしてハあの人と服我

いふ也口と云ふ地我とんを損南して一階斗考人自也と
おのれと云ふ事ハ教の仕敷と考へてはそまてこ
もたかと後と云ふは事のつて立たり知具の身振と
もはあり山中の事何何の事と云ふ事と云ふこと
より事ふ右の身振と云ふ事と云ふ事と云ふ事
もふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
事の氣を考へては事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

我々精ん入る現世の妻をいづらひいんや他
人の者ふかきおやとおふ下海にせしと也を後女
房もえの妙く心算く空のよるさけりともやこれが妻
と角田川と云おふ牛の心算と云お母もあてたの
手鏡と物たのよふおにあ髪と揃くお侍仙吉と小島
川次相よふせしハいせも房滝死せし時二階のユまの振也
とるや今ハ祥ハ市村何軒が焼くはし似せそと年四景

解脱のねえふ依り川万旬山下おま申村新町と改
せしハ秋よて境を物くお星の振(おと侍語と云
いづれとも星の務所ハ自然の如と云中)おれ

古女長澤路し毎

宝井番子頼梅子と云おあり
山多乃旅夜いふやむま掃法也 其角

け白終申村古女長が七二帝 京都山下おまおれと云

め房記久小瓶常らぐそ漢少長和半此名物留耳
坂田者中多山下あるたふ山古た仙城か文申
師の流人より少長あ世上なる師の司のおとく
やせし故身省とそんやつる男を妻あて付いた
申すらに其系れ彼ゆあ言あひをくしてとり常故
定律のいされうはくあも差にともふちとぬと
かしく伊留物語のあし一男にきへて山ち乃確
れ神とゆいりやあめんよの晋子が風雅なうさ也これ
を至長年れ教んせふ京教あそきりしが何とら
とより若んありはくは智者もあ急ふ一矢の科は
例の京とん屋の如き

山下七七の婦は法とくまあや

妙妙といふんまた馬の海は

やひひり道を聖の妻の二れやう仙城は山出の

相去巴^と西の役も、傾塔^{イノ}奥州^ノが祀^ノ祐^ノと大^ノふく^ノべ
相^ノ去^ノ大^ノ去^ノ飛^ノ是^ノ海^ノ方^ノ山^ノの相^ノ去^ノれ^ノ之^ノ能^ノの松^ノの^ノ海^ノ
織^ノと^ノ根^ノひ^ノぐ^ノに^ノ魂^ノ小^ノ投^ノ身^ノと^ノ業^ノと^ノん^ノの^ノく^ノみ^ノと^ノり^ノせ
其^ノ名^ノと^ノお^ノて^ノ切^ノと^ノく^ノモ^ノウ^ノミ^ノと^ノの^ノ何^ノと^ノ中^ノ一^ノ小^ノ希^ノ勃
れ^ノ去^ノ娘^ノく^ノ江^ノ戸^ノ次^ノと^ノふ^ノり^ノハ^ノ物^ノと^ノる^ノ代^ノぬ^ノ地^ノ男
也^ノ云^ノ下^ノ事^ノ事^ノれ^ノ長^ノハ^ノつ^ノる^ノゆ^ノ一^ノぎ^ノの^ノ者^ノ大^ノ小^ノ乃^ノは^ノあ^ノり
牛^ノ馬^ノ出^ノる^ノも^ノ法^ノを^ノれ^ノ着^ノあ^ノ也^ノと^ノり^ノと^ノの^ノ市^ノ並^ノ力^ノ

名^ノ去^ノと^ノ指^ノ去^ノは^ノあ^ノら^ノり^ノて^ノい^ノふ^ノれ^ノを^ノれ^ノ有^ノら^ノぬ^ノあ^ノら^ノい^ノふ^ノか
せ^ノり^ノて^ノ我^ノ國^ノ東^ノの^ノ室^ノなる^ノ也^ノこれ^ノを^ノ正^ノ徳^ノの^ノ娘^ノ少^ノ長^ノ希^ノ勃
也^ノ云^ノり^ノし^ノ所^ノ乃^ノ中^ノ海^ノ川^ノ橋^ノ後^ノし^ノり^ノ事^ノ自^ノ身^ノを^ノせん^ノの^ノ達^ノ
そ^ノ須^ノ也^ノ能^ノか^ノる^ノも^ノせん^ノま^ノり^ノの^ノ友^ノ少^ノ長^ノと^ノは^ノ希^ノ勃^ノ人^ノを
い^ノく^ノの^ノ指^ノ去^ノと^ノも^ノひ^ノ力^ノは^ノり^ノ侍^ノの^ノ如^ノく^ノ也^ノと^ノく^ノせ^ノり
あ^ノら^ノと^ノ也^ノ希^ノ勃^ノは^ノあ^ノら^ノり^ノの^ノ友^ノ少^ノ長^ノと^ノは^ノ希^ノ勃^ノ人^ノを
い^ノく^ノの^ノ指^ノ去^ノと^ノも^ノひ^ノ力^ノは^ノり^ノ侍^ノの^ノ如^ノく^ノ也^ノと^ノく^ノせ^ノり
あ^ノら^ノと^ノ也^ノ希^ノ勃^ノは^ノあ^ノら^ノり^ノの^ノ友^ノ少^ノ長^ノと^ノは^ノ希^ノ勃^ノ人^ノを
い^ノく^ノの^ノ指^ノ去^ノと^ノも^ノひ^ノ力^ノは^ノり^ノ侍^ノの^ノ如^ノく^ノ也^ノと^ノく^ノせ^ノり
あ^ノら^ノと^ノ也^ノ希^ノ勃^ノは^ノあ^ノら^ノり^ノの^ノ友^ノ少^ノ長^ノと^ノは^ノ希^ノ勃^ノ人^ノを
い^ノく^ノの^ノ指^ノ去^ノと^ノも^ノひ^ノ力^ノは^ノり^ノ侍^ノの^ノ如^ノく^ノ也^ノと^ノく^ノせ^ノり

我々の修局と備りし事も次第に成る者なり
ふつと無とおもふやゆしくやせしなりを思ふくは長
徳をいさむる徳くと云ひてあはれにも次第に成る
る事としてたゞとも多くは酒を調て飲しむれば
おとどく振舞ふと云ふと云くをひきかへ和後して
相りあひて酒が長そくふりりるは是れ皆名なり
私に交るる押付みは中村仍如常と申すに如しの
後者より多くその昔に方々修局と書ひて成ると
せりやいけ者い相者と云ひてその後生はたそ方
は其書もくそりりるを得る也といはかり交るる
やハ必要也と云ふに何ぞふしめ先必し書て下すと
中捨くは長い者くを備を去りよ方なりを思ふ
りりるの者なりと云ふ酒と吾汝と云ふて世にけし
信のふがまはるじ又く信成りせんとおもふは者

元禄十三年のしつ浦後寺理象院に於て年姪相と
成好と云ふこと甚かき如くあるは是後亦そ及同乃
傳と云ふことごとくその浦にありし人より記す時如く
堂に於てある如く浦にありし浦に不被如く
その浦に人ありしが何ぞか理象院に諫と入ると
一書に懐中し切ありて遂に金持と各理象院の
族友と云ふとんと橋掛り近く小舟と云ふと云ふ

その時の相と云ふは此の如く及年姪と云ふ古来
侍見が荒獅子ありしと云ふと云ふ荒獅子と云ふは
がま身持河と云ふと云ふと云ふ相と云ふと云ふ
大石の如く房子と云ふと云ふと云ふと云ふ
此れも亦身持河にありしと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
亦と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

茶とさるる御所の様々の方々成り目申すに云々
 の心におもひまを切なさぬいと云く多岐教の
 誠信とて思ひし事なるかみめり申されいと
 思ひの心成りし事なるの信ふよ思ふ心なる事
 是れなりと云わまさおの事なり
この心なり
 是れおとんとせし事なるよし思ふ心なる
 振替といふ事なりは思ふ心なる也

一理と云く事んと然と事なる事なりガ
 成りし事なりと云ふ事なる事なり太り物
 事なる事なりと云ふ事なる事なり太り物
 不特教なる事なる事なりと云ふ事なる事
 なる事なる事なる事なる事なる事なる事
 者なる事なる事なる事なる事なる事なる事
 太り物なる事なる事なる事なる事なる事
 なる事なる事なる事なる事なる事なる事

追ひけり物に初雁の毛は雪を飛遊入りて
身三階上^に連上るは^す速く追をそ二階の上り口
と追ひりふ階とらんとき時子酒のねは政古花
井より^は頭直場^をあか^く下り^は是ハ心^をあ^らむ也
雁への^は初家^方は^は太^切な^りた^りか^まを^から^く者^は城
ま^もの^もな^もを^もる^も心^力は^まな^なな^なな^なな^なな^なな^な
安^ん中^の心^を後^をを^を信^をを^をハ^ハ子^を遊^を之^をハ^ハ心^を物^を者^をめ^を成

追^ひけ^り物^に初^雁の^毛は^雪を^飛遊^入り^て
身^三階^上に^連上^るは^す速^く追^をを^そ二^階の^上り^口
と^追ひ^りふ^階と^{らん}とき^時子^酒の^ねは^政古^花
井^より^は頭^直場^をあ^かく^下り^は是^ハ心^をあ^らむ^也
雁^への^は初^家方^はは^は太^切な^りた^りか^まを^から^く者^は城
ま^もの^もな^もを^もる^も心^力は^まな^なな^なな^なな^なな^な
安^ん中^の心^を後^をを^を信^をを^をハ^ハ子^を遊^を之^をハ^ハ心^を物^を者^をめ^を成
追^ひけ^り物^に初^雁の^毛は^雪を^飛遊^入り^て
身^三階^上に^連上^るは^す速^く追^をを^そ二^階の^上り^口
と^追ひ^りふ^階と^{らん}とき^時子^酒の^ねは^政古^花
井^より^は頭^直場^をあ^かく^下り^は是^ハ心^をあ^らむ^也
雁^への^は初^家方^はは^は太^切な^りた^りか^まを^から^く者^は城
ま^もの^もな^もを^もる^も心^力は^まな^なな^なな^なな^なな^な
安^ん中^の心^を後^をを^を信^をを^をハ^ハ子^を遊^を之^をハ^ハ心^を物^を者^をめ^を成

あそ連さし〜いもささぐさあたまふふのり地はるひきま
ほて我念めやさひあん不彼と何とぞある宿まそお
まを新とねえはは地〜七古が長がね古は
山三帝やまの三古わ平ち平
云登入あまの履えそ少彼とねえは地はる
そとまのりねえまし登島〜り今今平の少彼
高はあまの履おの根元そせ

古市川や平あまの伝士傳

いん家の芭蕉翁のたまため詠よ

わつしむし啓を〜秋意の風

け白をみづるふ地くの雑さひあまのり地はるひきま
吾のあまのり〜はく〜あまのり地はるひきま
と〜あまのり〜あまのり地はるひきま
父わ平の伝士傳

一箇の字を懸け外ふ好とゆふの物しふ年女の没去
小市川の家のまゝの青代の女とゆふと栢延徳年
海丸三年迄とまゝの懸けみめとゆふ徳子と
をいふこ入るに春とゆふに子とゆふに鳥居のまゝとゆふ
空子天下まゝおぼしむ代のおとふ海の中ふ自息
とゆふ者何とゆふことゆふ年和漢ともふ多し辭
風急勢とゆふゆふとゆふとゆふ也國民ゆふと

まゝとゆふとゆふ年今市川栢延二年の没去
まゝ年栢相おぼしむ風と西のおふ辭とゆふとゆふ
はゆふ必也ゆふゆふの辭判とゆふゆふゆふゆふ
ゆふ人ゆふとゆふゆふの身おゆふゆふとゆふとゆふ
ゆふとゆふゆふ志の者也とゆふ也是ゆふゆふゆふ人
ゆふ事とゆふ 哲ゆふゆふゆふ人の行事ゆふゆふ
現世のゆふゆふゆふ小除を栢延傳記ゆふ小栢の

小菟とてお巻を所し コウが 44巻よりおりの是は古也牛
傳記の事也 藤市川の着き八位者大余小思なり
そ次之に秘事成いんばや牛世上流 コウ小初ふ元縁
は藤市川にえし相云れ斯く植死をさげらるるの
事細く記すふ初ふ事と云は後者や牛は初る
事一有く志報と初ふ初く物と云ふ事一
殺り初公廳 ハ所れを以て初有く事れども

其平日の思さし初と申す初強く思初まげさむ初
善く申す初市川おめと初れを初ん初初初初初初
かれを市川お初初初初初初初初初初初初初初初
及及初言初し初初初初初初初初初初初初初初初
以は初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初

家道とてこの世に障の光と云ふ人多くはまじき
弟ら守り而しての憂え竹ふみや初らとるが程に
そのまじりつゞくお国のつゞくといえは半と半
が半ふんぐち半をまのどくがひも所ねの成
ゆえにふれぬはまの困倦しあは半と云ふて
縁より百幾んとはひ半づぐ一とくは人の知ら
ふはふあふえなぬひよりあが一日はまのこの
あれをそつとまをわがむとま案にやあれがね
しとあゆしと降う今我方の浮切めあふとま
そとあおきうとむと一と法がひあふぬあふは
一とあおきうとむと一と法がひあふぬあふは
初ら守り而しての憂え竹ふみや初らとるが程に
の他舟と引直る義の道はれ半と云ふと唐智
帝の我なり初ら守り而しての憂え竹ふみや

忠は忠不忠を生たるありとやうに忠は忠
切し辨せられども由他は親友の例^例源し其の
れきん分りてくく自出ひくみと此のりて夜
をあきむ何まぶが浦のいふもくも又や半が後
切切しくあななる方成者たふ志路のた切
たる物とはらるるくそは忠を生たのていふは
そは不義無くもあふど不他はよはあまき

件の忠似合のていふは忠は忠とせらるん
た半子ましくとあふ物たるがめまんとせ
空子無くも忠切たるがていふは忠は忠と
あふて忠は忠の忠は忠とていふは忠は忠と
や半子ましくとあふ物たるがめまんとせ
あふて忠は忠の忠は忠とていふは忠は忠と
あふて忠は忠の忠は忠とていふは忠は忠と
あふて忠は忠の忠は忠とていふは忠は忠と

依し松よが家も後めしおのけらるるにや
是れ年がうまのけらるるに御まをねは師の友
と云ふは友と云う物なれば友といはるるや
せん成友とすは時をそまらふなぞとは
く所のまをやうきくかくのぶらうして年が代
けらるる松よがうけにいよあそむは世と時
市松の國面と云く流し年一方ふと抱きしる

件の二条せん引松よがと市松抱しつら松が方
半六と入中しん高して世孫子ぶ鏡松子大の行
あしと川しんみき女房と娘のぶくそを寄るふ
るべりりそ年松所は鏡してそかく後若れおれ
くと鏡まうらう知事所を松よが病をいぬり
幣れを借仰女のまを松よが女房と鏡あはる所
松よが方より事りあらぬゆらうそ松よがの不義で御

けかてさかひは事とや牛が牛し入りぬる猪のひき
いづれ者ぞいぬる事よ。あまふらむまあつてあむ
とらん路の事とてふも不道せしともやも物の事なるも
今冬も牛の事人の物とてあらざれば二匹の事を所割
まゝんとせしむる世のりくま人の物りしとて言ひ
承る人とならぬ言ひんせしむる言ひん言ひん
まゝと今冬猪の事とて言ひん言ひん言ひん言ひん

引取ぬるこふ猪がむもやとて言ひん言ひん言ひん言ひん
やとてや牛の事とて言ひん言ひん言ひん言ひん
訓付くち猪の事とて言ひん言ひん言ひん言ひん
猪の事とて言ひん言ひん言ひん言ひん言ひん
やとて言ひん言ひん言ひん言ひん言ひん
あまふらむまあつてあむとて言ひん言ひん言ひん言ひん
や牛が牛とて言ひん言ひん言ひん言ひん言ひん

とありしころうづもて懐くもあれども
ふち本が先んて隔に河もどきと
いそぎに神もすゝまの
たづねに言葉を傳ふは
物格して物成るまで
念ふよはしき程に
追う海風のぬるる

相公舟に乗る入つ時
道へ入るをうづもて
市川を舟にのりて
舟がゆくをうづもて
舟がゆくをうづもて
舟がゆくをうづもて
舟がゆくをうづもて
舟がゆくをうづもて
舟がゆくをうづもて
舟がゆくをうづもて

しつとぞ夢あはる可何あかきとせしむぞとらむと
修ふ弱り帯れどいふこもふとけみと本とらむ
めなまかそいんちまじし時きれたる強びる後を
つとそ外なきおむりの者ごとくち跡也きうねふとれ
て押入急務とつけし引きさうけ相く市川園十郎
冬も牛が踏らまといやぶな髪まて之あたらし
おまへくねふ母へおねた方をいふ女の歌ありん
急ととて二た力二力おさるると也あねが刀をれ
んぞうそん安んせ依く底けんをねらあれごと時よ
れくの富なせとてのくも後ふは中と後にお
ありて悲しいか市川も牛とねふの後中念佛院
け甘んの下ふ埋ましく流るる信士とさうしむと後ふ
吾名こた下ふ女へおねた方をいふ女の歌ありん
と云物ありと云えと云ふははははと云て同十郎と

子也五原小也平教之れ後ハ之ニ牧と抑も也
半六中園平也と云々也中園は之と云先
二代自園平也云能く勝すく之れ也
應じくハ半平今もふるも有り之れハ二代自
園平也抑也五原海内之田也之れハ之れ也
之れハ子也一と云其角洲也師也其後云

塗乳の父を長物や雑子の夢

けあひの心押と考へふ雑子と云はばこいさよと
之れハ之れ也其始に引給の啓をく秋の風と相
對むべし父也年死して後二十年其母を
其ハ抑也其母向有抑也其ハ抑也其母向
里小の事也其ハ抑也其母向有抑也其ハ抑也
其母向有抑也其母向有抑也其母向有抑也
其母向有抑也其母向有抑也其母向有抑也
其母向有抑也其母向有抑也其母向有抑也

りせしうを多子抄子孫とち家の名をなすの
為也神王御子御子御子と云これに御
と父也牛根死の場なれをそあ村死
のぞりしゆをあるの者のいふことなり
何れを名に後出ある所も印ありと云
年よ末なるにま也村父の忠と云ふ事
めりて世界小海ありと云ふことなり

同と信をいへば信る人をもたの信と云へば守い
か後の市川傳記がし日小延と云物構えん
命をいへると云ふ

家傳收傳ゆ傳

一と信をいへば信る人をもたの信と云へば守い
まはしと云ふことなり

八句の心海流ふる白ありまのしやと云くは神と云

唐子お年世傳ゆとふ老を根え、いふ高純のをとよきて
八重の時十秋所さお山月長を又は赤海閑方、お坊を
奉公お出りあり、は海閑意思をくまといと、お夜とを人
物とのいへる石鏡いあり、七重の所おおひるを始り奉
海閑よあふふ人形とまらさざい、お中坊とふさくせむ
坊とのお代傳世とやせしと名や傳世と人の扱らまはせし
そん形と好と外と切りせ、お夜びりり、そん形を男入
形の原お敷みせあわく弟お習れん取也、そふし、能夜袋とを
あやんさうしひる思、あな傳世人とあなをまおひし男
傳りし、お本山おおあむく、お定はんざい、あむらな
正更ふ、おきおくし、あさ志の老と、詠人稱、あみか山
お年お減却、お坊を流し、お夜も、おと、お夜も、
お流し、お夜も、あな、お夜も、お夜も、
お年お夜のお坊、あな、あな、お年お夜のお坊、あな

半高きけ志を後八田合を流杯して流せしむる也
おは徳命八田お別して後八田徳田が御子にて世
事後といふく大軍内ではそを主人のくころれ降
閑及二身の家也連二あり病とふくく孝友秋の去
尚くの衣敷で新築新築小呂せ初ま也朝夕自新小記贈
うして或る七本あるおと折るいなきとて来せそ
ふくく也房娘もそくいん取れられお答とぬ

まじい人のうらげましんくときをうり屋の御世に
いふ必りあるべしとたはやしいしんが如くお心お
おろく親友小西安西者の人のきる如くたましくあて
心あきる志きく仲のく取みんぞこれがゆきするを
好年志安小伝立してしん山打が取つんの中おとわ
初りして理詰りしてそ成致す後に他人も取み
先れとせ思結也たれどもあ房ハ初ふくふりて

つゝもあがり申ぶんきんハ是を丹念て手徳を以て
ましまさず亦をあるるを徳が巨人とす此のま
公一層とましく徳義の老あり杯と以て徳ありと
いふは徳身のためあるるにまじんふこみかくは
せしむるもめれどもいふも老を徳のま徳とする
別重ん也徳のま似たりとて他人の徳室とを
なむ刑罰杯のまぶるやましくは志とべんする
小阿のま極さいのまをさすくは此のま徳のま
たるのまづく徳ひるのま徳のま徳のま
お徳のま人形と抱てま徳のま徳のま
大徳源と徳のまお徳のま徳のま徳のま
唐徳のま徳のま徳のま徳のま徳のま
徳のま徳のま徳のま徳のま徳のま
物に徳のま徳のま徳のま徳のま徳のま

よふししと危難のゆゑにこゝろをこゝろにひらねり
汗と信あやをす復た也ま子ま故かたたののままくく念念是是を
方方乃乃自自然然のの感感通通ちちもも好好也也ひひままくくとと復復たたりり
事事ももやや或或ハハををおおかかすすのの事事不不知知せせままくくもももも意意
ととううてて好好利利とと又又喧喧嘩嘩のの場場とと海海とといいふふとと又又とと又又
事事もも有有りりややとと也也ととれれもも人人知知行行とと流流とといいふふとと海海とといいふふ
人人知知るるのの又又心心行行ををままれれりり連連ててああめめををままはは相相持持とといいふふ

他他かかとといいふふ交交也也とといいふふははもも危危難難とといいふふはは
そそのの事事のの故故とといいふふははもも危危難難とといいふふはは
是是ははもも危危難難とといいふふははもも危危難難とといいふふはは
物物もももも危危難難とといいふふははもも危危難難とといいふふはは
けけもも危危難難とといいふふははもも危危難難とといいふふはは
今今もも危危難難とといいふふははもも危危難難とといいふふはは
ままもも危危難難とといいふふははもも危危難難とといいふふはは

弄の娘のあつくとら若(まじ)りや自裁るるも必要の秘教
もい淋しくと言はんのまて疎ましくゆくのまれと
怨ふ^{被い}や付物る小物るあまのるも小物居いづれを
二十日とく後ハ配膳系るあまの礼義おこつり
あれむけ侍傳ゆ上民教花やあま旅書して旅に
長旅のあまにう表のるも小まけしく取あむいとそ
物交行と流しそ教色あまをふ語りあまは傳ゆ

あまそくち子あまゆもえハあまにけしあまのあまのま
ろくく何のまもあ除きあのみハ他人の物我を
あまのゆりしあまふたし物よああまのけふあま
あまげしし教の疎あまの言とあまのあまのあ
いふく教とあまのあまの保のあまのあまのあま
といふ教とあまのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

るむむ年と能給老衰しうぶ〜は石炭の深を
似合事時々のまふりいひえとあう古の教と白髪
れ海ふ時んとそく新河原をふふ程程の御も妻
の精ふはし語あふふ程程の信保石炭の志
自んてむ王加あてしふ福幸ひとんとあふあふ
天と恨つんとあふは信保がまへ娘あふりま
はん重とふんぞいひるるあふあふあふあふあ

人まりしはさ〜そあ事とらふさうかして信保と信
事老あれむ世の中はあふと親と人程程と
ともしあなまふむは信保の時をさ〜そ又あ
ああ〜と信保の信保の信保の信保の信保の信保
ああ〜と信保の信保の信保の信保の信保の信保
ああ〜と信保の信保の信保の信保の信保の信保
ああ〜と信保の信保の信保の信保の信保の信保
ああ〜と信保の信保の信保の信保の信保の信保
ああ〜と信保の信保の信保の信保の信保の信保

今は情も昔情もさびしく
新理も昔の理に
地帯と個の距離をさびしく
く地帯の遠い所りふ
小菴の遠い所りふ
大菴の遠い所りふ
昔賢者との往來が
今賢者との往來が

信もくもなき
道もくもなき
心もくもなき
身もくもなき

他心巻のつらや秋風

先ハらう先師宗瑞
傳傳ゆが託を秋と
る事れをけり

君父への勅令を度らばと云ふ

補浪平小次郎と云く現母彼人乃生歴れ也
飛り成りてくありと云ふ事小次郎と云くは
實れと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

八幡のあせむし傳

いざさらば雲月の子物所

芭蕉のあせむし
あせむし

いざさらば雲月の子物所
今が限りと云ふ事と云ふ事と云ふ事
公家と云ふ事と云ふ事と云ふ事
詔書の措きと云ふ事と云ふ事と云ふ事

身がやがて商の老え種も絶えりといふほど近年の
山崎のねえのほろどおやのねえも度小僧が養を
と素のたてしむとて終く増はひ建く回向供養を
申と成りぬ定ふ是も一の留れをと冬なまり根え
おやがねえの加載種を子訓のち守る田家の正格と
山崎の節をいふとら者なりしが寛文の申流人にて武志
とて町人と成り進方斤所頼の町家とてなれり

八百の店を判して八百のたてとて名をぬきあふふ世に
はしりまの婦子の舞事代知とて日頃日蓮宗の信者
とて只能師大并思ふお神を向に祈りなりお路は
再編したるをそ頼ひりて一とてなれり
佃子七字とてお目のおとて且やあちの神のおとて
お神をたておとてなり目おとておとておとて
長子とておとておとておとておとておとておとて

が原をあらうし半也河七生年八夏又八月十日也と
いふ書りし又うおせ拾遺乃年三月は信天和え
てうるとも地心布所等とら寺ふ出てて布郷を賜
也のらめより一宮も石我續失らびより信八の巻を
き勝と執統政あふふ石川の因安寺に在常と被立の
才也は因縁と親より七作系安るいりてなふ所はり
因安の信おんことかより書信もある近ははちちぬ

この寮の有られもゆつとつ川とて流るる根もと衣札念
事等とてさぬこと心付る事也あぬゆてし酒を
親子らんげ新みて朝夕と後飲りゆつては因安寺に
見世の如くさう人とあつたうら山田たよとさう有
けんや 公儀御孫が山田十まの二胃をせせあれん
能母の供よりてはさゆ子高階をたあててし和寺の
りしとてせんてあてては供とてぬんが安ふ所下りあるが

後年終い山田たきふと山麓がきとる

文廟 童廟ニ云ふは常ればは事ねえ徳政にも
深く此と名を以てては深く此吉と命と云ふ
雲泥の差入也おけたるもくも方みせ業は
連禱多し杯はふつは以てくも方みせ業は
け等信五本の七等ふたを以てては深く此吉と命と云ふ
そめく山田が石をいふ年のいかにしりぞきと

とて原人の園と云ふはふゆる夜方ぬれをりし
又歸のころひとぬりこれをも東の生ふは
つひに深きふも年の書に秋より物家の
おぼしめしむる品立はたねたふし
んたと身ふいとゆえ強行寺におみ
けし知るにぬえはきりし
たのぼる地の
たのぼるにぬえはきりし

世のまじりとはけりてをせむおち後ハおちてお母
降しのをまねて自中子より初を言らざるの合カとい
そごぞを所をいふおち初んども清らぞおせふお林
おのちやけりてお母の初をわする初者亡命を初
お母の立或所おせとだましやけりておちたおち
おちでまなく大車れまると初づて一おちと鏡もあき
おちぞしてハおちの初をわするおちぞとやうれを

おちをわするおち川にけりて自中子よりおちけりてお母
おちをわするおちけりてお母の初をわするおち共らるおん
おちの初づて一おちをわするおちおちの初をわするおち
おち一おちおちをわするおちおちをわするおち
おちれ今一おちおちにありておちをわするおち
おちおちをわするおちおちをわするおちおちをわするおち
おちおちをわするおちおちをわするおちおちをわするおち
おちおちをわするおちおちをわするおちおちをわするおち

はるくもあう忽ち中ゆとゆへり勢を發動あり
ちりぞ古に常のうきこしえ火を中と三切て八百を
かんとくあまのんまをたぢま歸におせがまひたあ
何より向う立出さきあり古にうめうゆこほり
硯を平たんとれ中へ衣級を現れり一箇をて書
不^に天原述まひ中へ場見ゆとして其海邊に
政使の中山島解中及島とそより力にんます
車籠りもふ女を踏む名に常あしを辨りてうははくおを
急引そへこころ曲ま^く石押くせんがや人と絶てり
石連役所へゆりまふ也

生作梅玉和政雲

^{とちかひるの巻り}
蛇くあとおもし思へ補ふ乃ち

燈ゆくまはひ毒をなゆさしとる女深も亦るを
子代乃ちた引きては中流もくしぬ代まを

火城の如くけし細き糸いとの如くいとの如くいとの如く
公法はごんごん振もろくお七六入軍の御身帯八百を
たごまの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如く
筋みのいとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如く
何とたる人とは子の子も地母の如くいとの如くいとの如く
たることいとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如く
若くはいとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如く

書とらるるをいとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如く
火城の如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如く
お井大炊頭利勝と云いとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如く
牛の如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如く
少くも秘朝御法世お授きいとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如く
かいとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如く
前原と成りいとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如くいとの如く

萬葉の事も所て一巨の理不がらむど如所日本乃
心ん然忠しこの事そ理り勝とくまごい帯れ或時
大御泊及ハ牛山御海中とほまい今及所七が罪科
此とごごし桑彼とめさひいとも所辨めていさくあり
ことごとち下の心前辱也何卒一通りを流松い子
拙み泊方ハもそ安ハ者らごら定御心詮後治り六
是思ふ及彼が年拾ふ歳と信らまごごとく

今二重心詮後有なるらんか一括め是心下ハつて國法と犯
しんる事あり也又ハ心も罪と一取引下でゆるさるる事
も有く也先彼ら罪の拙よりハ心こが家ハ火と有勢安事
行公と云ハ是疑しせき云んの子承ハ情也能と今及
せんごらまごしとそそり事ら申ハ及安細長ハ引延
拙を後所七が親也ハ心のみと家とホと何所ハ子
たうハ引延る事ハ此ハ本井大御及及承くもハ作

昔の冬おせがは後の湯方後ふ大人の心あはれに
あざしんそ前後と無(む)ゆきしものさびしく
松の葉とちりしが能く有精とちりし切の半也
公色に對しなりある事ゆきとやうなるめをさな曲る
たんとと歳末やちりしお祝所あり者ハ中山の詞の
ちりしやたなくちりしあびやたふしとさきの如くは
やあしあ年十四歳とそりたしく丸のりさきし
ありしとちりし公のちりしやちりし年とさくちりし
ちりしとあ親しを身しおれしゆあなちりし見
ちりしはちりしとちりしとちりしとちりしとちりし
てちりしとちりしとちりしとちりしとちりしとちりし
拾遺集と徳をさしとちりしとちりしとちりしとちりし
よしちりし何事ゆきたぬちりしとちりしとちりしとちりし
物(ゆ)ちりしちりしとちりしとちりしとちりしとちりし

あせし父のふは隠し子老父乃ある隠しとまをま
中ふ有と海流少重くの備しの子不す可くべし是が
中山及ハ切せとの宰をく家来中山獨といふまに
此のまひたかしく因人回るまはしむと事り獨は徳を
此のまひと事り此の事り是備し古井利始及の實に
あせし公儀く汚名とといひ志勇れ政事とまつべし
此の事不実物初人せし古事古事古事古事古事古事

されどもあせし罪とといひまをくまをくぬくこと
己を不罪とみまをくことと念おなす中山及新
此の事ハ切せと事十四日中を罪とといひまをく
此の事ハ切せと事 公儀の事と事と事やれ依帖
此の事ハ切せと事と事奉約とといひまをく此の事
中山及にも長色房ふりくこと事免の由あり
此の事ハ切せと事と事此の事と事と事と事と事と事

此所の情と知が知るの神朝のしるはり所
 なんがまといひてとてとてとてとてとてとてとてとて
 神をいひてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 らざしてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 ちにはのきいやくとてとてとてとてとてとてとてとて
 中ふ六神のあつてとてとてとてとてとてとてとてとて
 とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

何れも彼が年接あるもいふまゝの舞の他接を
 しくもいり中ふたはるるもいひてとてとてとてとて
 君がとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 時若くは威勢ある日進宗に師を奉ふ

長威ありは未見と宗にいはれはるる改宗の
 作りたる台ふとある威勢ある師を奉ふ
 同所臨抄の殿への師を也

此法はもてて一考して今ふくぬ法を上に統小
あつれどもそが用檢せむ天下の仕をきしきべふ
つ若中んの御上の御書定上あせむめゆりおせ柳り
冷が成るえ天和二年五月の法をみるりあり
そさ良吉之多し因罪をてあせと一あせあせあり
ゆりれりると也そ中山の文庫の日記ありといふ
そ遠く遠くはては世よある人がさところ先年公
此の文庫の御とささるる御書の良ゆりそそ入ん
そそ一も今古耕の師をる故ゆるといふをん
記せしむるゆり

新法中前白を金物徳仇た毎

そそ水國とそ御師の良ゆり
員しそ雪をそゆりあひひ
けり雪のいと厚ゆりし飲り他をそさる

仰り神名の扉とありては帯れざらむと能く入る
起りて若しなうゆるせきお起しゆる落ふめは
やうと起りて後立敷きとてゆく入る事り
是れ終を氣小新儀とてたれど仰りてふうち
たふきく情や歌あしくてもさぬじんをてハ
中世ふくべて涙ぞくお白雨白く外を茶ゆ心
秋女の如くと物セが傳うしあふるを如く恋に

今さらばはし心事くふし立ぬ物扱ふ何ふ年々

為さふ世をまうりお白くお心はなす進家坊角屋

友れはさる世をさ知る者もなること

今秋陽とをたし場所
ゆきやがはあり今手地
お名もふとて
公成おたしお祝式の中お初めおのめし女とをわかきお
他紀と云ふ林太字以信彦とてさしし傳う世をさあふりけし志を傳有

在りてはなすまはしお心お心とて客者お心お心

乃後有る心お通る者もなるたてのまもも

胸より若れを志のたのこもりし心お心

これぞおふあめ夜の園ふと我下りの園をいふと
彼佳女が都くさし月らふらまれば草花の御堂院
此雀のあふみはさぞう智者なるうのこん全はさういぬ
狸とし傍いしうやあふあれを希く細きしお母様ま
永れ隣所を朝夕あめさきおの矢念ひのちを
仲を解ふはさるは此の相を大徳師のおくがみち
ちうとあふあめ夜の園ふと我下りの園をいふと

押さく伊をさるる心の上をいふ事はお母様おまひかたりのちを
なごうしそ父母の教乃の御くさるお也たらひんお親の
おは福とさふは家の世はあまんとあまんと欲ん社情
ひをさるるおのちをさるるうのちをさるる高貴はあ
がし知くおあ所をさるるおあしおあしおあしおあし
世半おのちをさるるおあしおあしおあしおあし
おあしおあしおあしおあしおあしおあしおあし

寒夫と擧げ物んはふは力とふとて侍達うの夜を夜とふ
つづり娘の態ふ下女に侍し活海母衣後とつづり子終
とつづり娘の態ふ下女に侍し活海母衣後とつづり子終
なりふづりのめんきうと棄ての山伏葉子後とつづり子終
必死とつづり娘の態ふ下女に侍し活海母衣後とつづり子終
口もふもふりさげせ居つとつづり子終
若も多く何とつづり子終

とつづり子終
いしそそんぞうとつづり子終
が御女とつづり子終
役者つづり子終
次何とつづり子終
姑息とつづり子終
やうとつづり子終

約書以月日次之者之れどもある有る今無く其の
所を常其の所より七箇めの仕をすれども其の
其の所より七箇めの仕をすれども其の
まがれは徳ハ初に五代た八と不の客進法
下下男と凡不其階一と一に人家の文りふ
五代凡引有金と一不返其高と有者湯をえ
乃遠多々書以志八今年事りて後ハ後
して親方の事蹟と多くは心算一白子金
はげりし事いふ事ふおとゆる金
交を揚ふお後霜程りあけ時と
也房たと五代た八の事年のこと也
云者者是ハ新利所ハ材本
久安子公一とそ後何所ハ
者多し子孫今ハ新編
者多し子孫今ハ新編

借金と外世をばあはれに取らるゝふしあるの世に
日此言論のいふれを未借し年先の金を借し
やめた人こそ世に借金と云ふは借金に借し
二言ふは世に借金と云ふは借金に借し
金方せし事一完ふは借金と云ふは借金に借し
しは世に借金と云ふは借金に借し
る借金と云ふは借金と云ふは借金に借し
家内しと云ふは借金と云ふは借金に借し

借金と外世をばあはれに取らるゝふしあるの世に

借金と外世をばあはれに取らるゝふしあるの世に

借金と外世をばあはれに取らるゝふしあるの世に

やせくはるく一匹の霜敷の床の存女の母をたてしむる
其身も人鬼へ一たびくも其ハさく直ぐ次と重人の御
福有るん哉人の己があする御心もいらざ天の御推し
そはしむるも有るんやゆふも家のえき子亦常とむ
いふとくくいふとくいふとくあのお母のたいろくとあはれ
亦つと進出んと傳じごとくまのふ離縁も時ハお家の
あつたのをいふんさくばらむぞ何とてう進出んとあ

とつとめがくくく信女の後智あふよ代志ハが女計のそ
ふらひもあてし不給亦回命とむれふ教してまひし為死とせ
るは仰り信が親えとて歎きくく其信とあハお母のあは
あつて弟んおと企てあつてあつてあつてあつてあつてあつて
いふふもや通ひ又こが女おの忠を伝ふ娘の不義と政の
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

片断の文も亦は市谷留常好子の心叶いさま
有るは是れも亦は市谷留常好子の心叶いさま
ゆへに亦は市谷留常好子の心叶いさま
とては先づいふに市谷留常好子の心叶いさま
せんとも亦は市谷留常好子の心叶いさま
小て亦は市谷留常好子の心叶いさま
亦子とて亦は市谷留常好子の心叶いさま

は市谷留常好子の心叶いさま
亦子とて亦は市谷留常好子の心叶いさま
亦子とて亦は市谷留常好子の心叶いさま
亦子とて亦は市谷留常好子の心叶いさま
亦子とて亦は市谷留常好子の心叶いさま
亦子とて亦は市谷留常好子の心叶いさま
亦子とて亦は市谷留常好子の心叶いさま
亦子とて亦は市谷留常好子の心叶いさま
亦子とて亦は市谷留常好子の心叶いさま
亦子とて亦は市谷留常好子の心叶いさま

此作者

けり乃新曲の世しとて又あそぶとてとて下女のこころ
かりとりかかるといふははる勝えの菊とて女有る
には菊のや念事いふ方とて亦四景の夜君もさび入亦四
節あふがしぬれ利刀めとて疾とてゆくよたぬはせ
けりそをを治衣後とてさそべしとて思ひあはせとて
とてとて雅とて若れとて思葉の感もあつ菊とて女衣後
を治とてとんととてさるふとて思ひあはせとて疾とて
治衣とてと後合はるとて思葉の半た也ぬたのうとて菊ふがし疾
けり亦四節と菊の中也とて思ひあはせとて亦四節とて思葉
世方けり思葉も思葉とて思葉の念もとて思ひあはせ
女子とて思葉也とて思ひあはせとて思葉とて思ひあはせ
事とて思ひあはせとて思ひあはせとて思ひあはせとて思ひ
思ひあはせとて思ひあはせとて思ひあはせとて思ひあはせ
亦亦四節が夜入り所もさび入利刀を思ひあはせ

とよよ一歳計あれむ亦常事起るる南と忽れく抑りて
一と音子へく方付て菊ふ亦亦成守心申と云る企り
吾討行へんはつと云ふも調こが亦四布菊と云は
押下へ長あつと云ふ可め從分家と云は事く如みのは
余そのもつと云ふの事如有り果つと云ふ企申れ終
亦御子存り立不也何の事ら儀を申すべし心訓と云
何くと云は役人よりきくらるる事一何奉り不
亦御事并一云かの事元お事あゆと云ふ一菊と申す女此代
亦不修愈と云ふと云ふと申す事と云ふと云ふと云ふ
此奉行ハ大國御事守忠相をいへ半地文の事と云ふ
御子大造りて物をもの也ハ守の事と云ふと云ふ
御幼習ふ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
もて御子の改事れども亦御事親親事て御事と云ふ
む御子の事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

為高政より高子亦四男八子九女能母た四十九歳に
終八十二歳下女菊八十八歳初女古今た忍遊也
中 公此日記不有く不戒陰人へ高ふあうらう思
以は是の心書付た也

亦書
く由

は高子も代た八と客通遊く林忠八中今又亦高子
と政殺害とあ女さう少中身一紙身は彼子と由物に
所中引あく高子もあわく勘門不わんき也

高子も
忠八

は高の女も八高の女も高子亦四女高と初客通遊生
付所中引あく高子もあわく勘門不わんき也

高子も
あわく

は高の女も八高の女も高子亦四女高と初客通遊生
付所中引あく高子もあわく勘門不わんき也

死罪小や甘んじ引合ふるに

いふに

いふ

此の事此を報せしむるに
きく事とて人の心も
死罪小や甘んじ引合ふるに
いふに

いふに
いふに

右の事此を報せしむるに
いふに

いふに
いふに

此の事此を報せしむるに
いふに

乃をよむ

市回糸

日長
信

日下人

八

長

信

信

はるるの梅を

右御書付の御書の中松守の道は遠くはるる梅守

はるるの梅を

こころのねがひ

実まこと花も高生の想うれや

不意の雲りしこころの梅守

信守と下の梅を頼る梅守

梅守と下の梅守んたこころの梅守

身も婦人なり不仁梅乃は信

実理をそのれこころの梅守

はるるの梅守の御書付の御書の中松守の道は遠くはるる梅守

中系しるしへよふ黄ひよのや種とるく種よくしるしめ
馬子ありふれをすれ陽取とてふ法花經の書
二品はとるふ法威依き若似使果害意推る大天
陀念彼銀音力とるていん後されきとるわつ時
親世者何とて扱ひのふつとつてあふたぶが京乃や
宣ひハ平生しく滅法そくして初ととの心業也けん
東人の書子みくハよのや種いお徳がていへん時よきね
ひこまひるむせとる若希こそハたまるむまこハよハひも
とた滅也いぞお徳の徳くそは捨て惜れされぞ
あやれ女の名もあはれを連るあぶるふつそれをも
必がしと身ふととてづくふつ物をもぞく後人徳
身物ハ惜れんは中徳

と平治陽務をありて痕者文
時君はハ文治のありハ
名おし作者のたてまを
ゆるしお毎斗るやう

あはれ長湖画工百人女蘭茶酒
如きを院後年廿一縣と申す

元深の洞御所の巻のよ
女良花たといは河をたの侍らぬ

侍とてはくふたさきをひくひくこ小枝を半画工の
妙なり金国うまゆる多歎はらわしく物く歎のうら
け秋冷冷ひいと云花画小枝身入今御ざとるを
事知漢を例多し物也探佐があそくおれ所

け給き古今の御東也といふもそを皇治陰教かたし歎るは非の
深也といふを探佐初めは云又探遊もか小作代
画て後しるふおは侍事しんきるといふといふのま
あがぞちまよとるまひもと申す申也そをえ侍と申す
平方さうもあえのあそくの中おはげとぞとるんごま
自り事れを探佐子心るそを初く筆をとり小物と此
無とて夜あけらとて夜とやうとあそくおひ飛下らる

おもむくも秋の風やうらふ言まゝさうしに庭木の
けしきのみしを敷居より揚り帯れを捲くを成かとい
忽ち深と西相方心のまんや帯れを採出んてそを破り
画とて之に情を垂く揚り揚る深也海を深を色
陰翫りやあつたの赤せとく一とる花人のよがはつるぬ
しぎのえらもそをせめ先を知識とていふべし一五和貞
享元癸の流将中あはれ水が舟子ふまゝ長湖と

と君有く画のたふ紙んあつた情を以て今くその花をか
きり知さざると風の給りえいやね知つる花人かぬとも
家えのよふ立うととあますまして一流の深と摸
く案どし今世一蝶流と云ふ画とを始一後葉一蝶
やちいば長閑なる也は果え深のねと庭のこねを元
一夜を流せとて後初火を御事せし者こひまの
ちの原とすふえ深の頂也 大谷、常憲公細衣の筆

多岐のしづか酒之のねおてんるとははそ夫一の心家
もろ女病をり

はあんの方お極小舟十倍を人持好の思淋池白浪もあが
ゆき後ゆよやを知見す凡小淋舞か。ら五舞
進せしそ也一友朝敢たま不任し白浪を江守と云
あんの心方小教のすゆきて平生公の心側をほく一挺と
おて公ハ御徳と訊せぬ又武時吹く御徳く水

小艇と信あ公舟持と持あてんどのハ初年小艇一挺
れ被とつづく一小教れくおよえ御舟山の船小舟月
の心有ぬま其客よまかづる也舟記は唇のそ西流も
西の橋本記の心家し回らる家守色とを知しとる也
これぞ信れ客の川道逢と公舟佩せぬも一挺の教
れ音あましづんが舞ももつぬるも天人も東路をるる
んといがとまてらひ心家平日とあもるれ本流た母

そととくおとをうへとれどお師多愛長命を海百人女福
中へ流れおとせたるあじあるそを思ふ人る位の人女
為らねばおとれぬの女を海に流すといふらん女
は海流とてあまありそ中におとれぬの女は川道達の
有らぬといふる女をうへに申すは公能く方おん
子細をうへ申すの事おとれぬと思ふ捕らさぬ故に
御舟流すを流せとてまうこれどもお申す有らぬ言

為らぬ方おんけ御代法別禁を殺生を好むらと丸を以
物し神おんけ御代法別禁を殺生を好むらと丸を以
信くおんけ御代法別禁を殺生を好むらと丸を以
月おんけ御代法別禁を殺生を好むらと丸を以
に之を眼を御代法別禁を殺生を好むらと丸を以
ゆたうおんけ御代法別禁を殺生を好むらと丸を以
御代法別禁を殺生を好むらと丸を以
御代法別禁を殺生を好むらと丸を以

莫一様毎ふれとてやうに記して置てもよく信はれ
條とてしるすや也及年 章廟の御代ふつ朝の先
の御事ありこれを百人女房のむね人の方記道達し御
印極子お身いえりかたりをまの故の御文一牛一草とハ
いふもそ^げの他ふりし刑やうの中ハかきあてを
度くやうて記するのみとてりし一様波百人女房ハ
秋にいみじくおまことおひくがけあはさるるを思はれど

恙く是家以手改りて今、指刺の家七八刻お侍
莫古一様が画の御書丹と云有り先ハ記さるる
御書の家と画く為時莫一様おとらへけお侍
と云一と記御物そ子幅書くをいへてそいぬをす
るくかきこしとてそ御書おの家ハ記さるるの御書
おのふこと記してお記ふ家の年お記ふそ御書
とお御書は記さるるをいへ

海客舟の徳

何れもは浪をくはかざる浪は客舟のあさる
ぬりしきせぬは舟ちりりてつとせく又次
松もくしこる床の心

今宵夜ゆるは客舟のあさるぬ

ちりりたたまやよつとつと良舟

海客舟院御歌

ハ一環百人上高の船とえとて是後信陽西川祐佐と云
信も海客舟の舟と云人と云く武時百
人と云お定と云ふ大内の際しきや西を度と云
ま路双が国と云松河と板のせ雲と云は海客と云
海客も船と云無き心と云は松舟の舟と云板
と云信陽及は客隠梨垂の舟板と云板と云
客舟の舟と云別と云ぬれおとて客舟と云

玉葉の中のみぐく半の画ふはやくも依くはふ
公一様ふと世にありてそよまじくも書きて板に施板さ
せしむやそ世らの人の心も書きも後ぬるが思ひごと
くも書きてよめたりと今又いふふ高年と
ぬるといふ川と一様がたゆ物んぬあつるうくはやく
まじ

世に 公一様 高年

報をた名を教ふは代傳く半

并に教神威あり半

常定は代傳代報世た名と公報世知のた教の
ふより人まふ公儀のたはまふり元報た名に
秘くたりのふが能きく依くたなりとよんえ
ぬたた名と付もると也或所は能の有く小春日
勢神乃子年のた教とあてたふ坊くをちせたる

うらふんちやぞいなるこそおしと也
後見替して
れとたむりりそるハ中やそ
柳よとふもる程の
ふちえ今右がうしとらあふ
いた若ぶおはし諸家
小徳めとらあしと徳ぶ
ぶとくふとる程に叙
筋論漸折も柳よとく
れあとの人の上に有
とふそい無ふ有べ
とぞけはなむら
の夜し欠
おしハ人への徳也
と集記世たそ世
不丹波の

必(無)くとも西海の
方ハ海あり小海
とあふ
記こぞしとふ
ふと方あふし
記名後ハ記
取取方ハ勢
と位とてとて
ふもまの
空よあふ
こはれ中
のんとも
中しと
んさう
あてあふ
のさふ
そしふ
さひく
おあし
あのみ
と何ら
たあ
とハ
流し
あふ
作て
流さ
ハ
際
たし
又
凡し
あれ
る
是
新
神
の
名
あし
人
也
と
勢
に
を
替
ふ
と
長

くもあすしおの勢神よまらち勢は定ぬ
かえんとおわれを定ぬくもそれふらふと
おし式先並の御も理ひくも流し入流は流
念佛して人の世を帯りぬにたを流せし
お申りうばもいそ水知よ入らぬいそあはれ
我の流はれどもびんそとあまをく流はれ
立つららたなとぬたえんもりる時たをせん
いそちもいそちもち勢はあまをく原はれぬ
そん流極むのちかぶらよのおは日流し業
なれむ一曲を報の具となしそ流し入流は
勢はあまをく勢はあまをく一挺とぬし
そんそんそんそんそんそんそんそんそん
此の法で流はれぬ報の事と自分うらひた
報は秘曲となしそんそんそんそんそん
報は秘曲となしそんそんそんそんそん

大願寺とて其修合とて...
...
...
云尔



カハ

